

日本文学史

王長新 著

外语教学与研究出版社

高等学校教材

日本文学史

王长新 著

外语教学与研究出版社

1982·北京

日本文学史

王长新 著

外语教学与研究出版社出版

(北京外国语学院23号信箱)

长春新华印刷厂排版·印刷

新华书店北京发行所发行

全国各地新华书店经售

开本 850×1168 1/32 9印张 234千字

1982年9月第1版 1982年9月长春第一次印刷

印数 1—8,000册

书号：7215·26 定价：1.00 元

序 言

日本文学有一千多年的历史，是世界文学宝库的一个组成部分。有历史悠久、内容丰富、体裁多样和善于吸收他民族文化的特点。如艺术价值很高的文学作品《源氏物语》产生在一千年前，在世界文学史上也是最古老的长篇小说。也有某些独特的文学体裁：如艺术性，思想性都较强的木偶剧脚本“净琉璃”，仅由十七个音节（“假名”）三句话构成的短诗“俳句”；文中有诗，诗与文相映成趣的“俳文”等都是具有独特形式的文学体裁。仅是日本的韵文就有“汉诗”、“和歌”（由三十一个“假名”构成的日本古体诗）、“连歌”（集体成章的长诗）、“狂歌”（讽刺诗）、“大歌”（古代宫廷中祭祀时使用的古体诗）、“小歌”（民谣）“俳句”、“川柳”（讽刺性短诗）、“旋头歌”（5、7、7，5、7、7形式的六言诗）。“都都逸”（多是在酒席宴前唱的7、7、7、5形式的四言爱情诗）、“新体诗”等多种格式。

日本明治维新前的古代、中世、近世文学受中国文化的影响很大，资产阶级革命的明治维新后，日本大量吸收欧美文化，文学也受其影响，特别是早期的人道主义、自然主义以及后来的颓废主义等都对日本文学有较深的影响。

关于时代划分：本书分为古代前期、古代后期、中世、近世、近代五个部分。古代前期以奈良时代为主，当时日本尚无自己的文字，文学作品是借用汉字（用汉字拼成的日本音节文字，日文叫“万叶假名”）写成的。主要作品有古长诗集《万叶集》和以神话、传说为主要内容的《古事记》和《日本书纪》。古代后期（平安时代）日本发明了自己的文字“假名”，是借用汉字的偏旁等构成的音节文字。平安朝（794~1192）出现日本文学的高峰，名著《源氏物语》就产生在这个时期，还有诗集《古今和歌集》、随笔、日记文以及长篇、短篇小说。这时期的一个特点是女作家辈出，称霸文

坛,《源氏物语》就是女作家紫式部所著,其他还有清少纳言(著有随笔《枕草子》)、和泉式部(诗人、作家,著有《和泉式部日记》等)、道纲之母(著有《蜻蛉日记》)、孝标之女(著有《更级日记》)以及小野小町、式子内亲王、讚岐典侍、赤染卫门、伊势等女诗人。

中世纪文学出现一些新体裁:如以《平家物语》为代表的战争小说,一批“隐士作家”写的“草庵文学”,历史小说,“狂言”(一种讽刺性的独幕剧),“小歌”(民间歌谣)等。

近世即江户时代,日本出现另一文学高峰。江户时代(1601~1868的封建制度后期)中期以后,出现了城市商人和手工业者,形成日本称作“町人”(市民)阶级。新生的市民阶级创作出大量丰富多采的市民文学。江户时代的“町人”在政治上并未掌权,是受武士压迫的被统治阶级,但在经济和文化上创造出他们自己的经济和文化,在文学领域,“町人文学”很快占了统治地位。江户时代占统治地位的文学是由被统治阶级的新兴市民——“町人”创造的反映“町人”阶级意识形态的文学。这一点和古代、中世截然不同,古代、中世的文学是统治阶级的贵族或武士的文学,是代表统治阶级的利益和反映统治阶级的思想感情的文学。

江户时代的文学有井原西鹤的“浮世草子”(描写江户时代新兴市民的经济生活和色情生活的小说);以滝泽马琴为代表的“读本”(类似我国的武侠章回小说);以十返舍一九和式亭三马为代表的“滑稽本”(以讽刺、滑稽的笔法描写市民社会各个角落生活的小说);以山东京传为代表的“洒落本”(艳情小说);以为永春水为代表的“人情本”(言情小说)。江户时代的诗人出现两名“俳句”大师——松尾芭蕉和小林一茶。前者是脱离尘世过着世外生活的自然诗人,后者是生活在下层群众之中深切同情被压迫者的人民诗人。

江户时代的另一出色的文学体裁是木偶剧剧本“净琉璃”,代表作家是近松门左卫门。这一文学体裁在日本文学史上占很重要的地位。近松作品的文艺性、思想性都达到了很高的水平。

明治维新后,日本进入资本主义社会。文学自然也出现了资产

阶级文学。但因日本资产阶级革命的明治维新以后抛弃了资产阶级民主主义的政治路线，而是加速地走向军国主义法西斯独裁的政治道路，剥夺了人民的民主和自由，在思想意识和文化艺术的领域进行严密的控制。致使明治维新后的一些资产阶级作家无法“走向社会”，很少见资本主义发生、发展期的那种批判的现实主义文学，除少数作家在个别的作品中部分地反映一些社会问题（如二叶亭四迷的《浮云》、德富芦花的《不如归》、石川啄木的诗、岛崎藤村的《破戒》、夏目漱石的《我是猫》、芥川龙之介的《河童》以及叶山嘉树、小林多喜二、宫本百合子等无产阶级作家的作品）外，即使是一些名作家，也很少涉及社会问题，而是把创作的范围和题材局限于私生活和个人身边的琐事。日本文学术语中的“私小说”就是指这一类不触及社会问题，与一切社会矛盾、阶级斗争皆了不相涉、专是描写个人与家庭私生活的小说，在这里看不到有带典型意义的社会题材。战前的日本自然主义和“白桦派”等文学流派，这种倾向很显著。

一九三七年日本发动侵华战争，拉开第二次世界大战的序幕，四一年又发动太平洋战争，进入全面的世界大战。全国在军部的指挥下编制成战时体制，在一切为战争服务的严令下，文学也变成为战争服务的“国策文学”，直至一九四五年战败投降为止的八年是黑暗荒芜的八年。这期间一些不肯屈节的老作家被迫停笔，只有少数“御用”文人和象林房雄、火野葦平之流的“转向”（叛徒）作家写了些歌颂侵略战争的文章和歪曲事实的所谓报导文学。

本书是作为高等学校日语专业的日本文学史课教材而编写的。

因篇幅所限并为学生重点地掌握各个时代的文学特点和有代表性的作品，采用了“重点带一般”的写法。如古代前期以《万叶集》为重点，对《古事记》、《日本书纪》等做了一般性介绍；古代后期以《源氏物语》为重点，对《古今和歌集》、《竹取物语》、《堤中纳言物语》、「历史物语」、「说话文学」等做了一般性介绍；中世纪文学则以《平家物语》、《方丈记》、《徒然草》、「狂言」为重点，对其他做了一般性介绍；江户时代文学则以井原西鹤的「浮世草

子」、松尾芭蕉和小林一茶の「俳句」、近松門左衛門の「浄瑠璃」为重点；近代文学中的明治时代、大正时代文学亦各有重点。

为了使读者更好地理解各个时期的文学特点，对各个时代的历史背景、社会的阶级关系以及经济结构作了比较详细的介绍。

书中对难读的人名、地名、书名以及个别难读的词汇加了标音。

书中附有二十余幅插图。

书后附有日本旧“国名”与现行行政区划都、府、县名称的对照表和文学史年表。最后附有主要参考书的目录表。

因时间和水平所限，本书编写得很粗糙、错误不少，希望各校同志以及广大读者给提出宝贵的指正意见，以便今后修改。

著 者

一九八一年十二月

目 次

古 代 の 文 学

第一章 古代前期（奈良以前及び奈良時代）	（ 1 ）
第一節 序説	（ 1 ）
第二節 神話伝説文学	（ 2 ）
第三節 古事記と日本書紀	（ 6 ）
第四節 万葉集	（ 10 ）
第二章 古代後期（平安時代）	（ 19 ）
第一節 序説	（ 19 ）
第二節 和歌	（ 22 ）
第三節 物語	（ 25 ）
一、竹取物語	（ 25 ）
二、堤中納言物語	（ 26 ）
三、源氏物語	（ 28 ）
第四節 歴史物語	（ 42 ）
一、栄華物語	（ 42 ）
二、大鏡	（ 43 ）
三、今鏡	（ 44 ）
第五節 説話文学	（ 44 ）
第六節 日記と随筆	（ 47 ）
一、日記文	（ 47 ）
二、随筆文	（ 48 ）

中 世 の 文 学

第一章 中世時代	（ 51 ）
第二章 中世の文学	（ 55 ）

第三章 公家貴族の文学	(58)
第四章 草庵の文学	(63)
第一節 鴨長明と方丈記	(64)
第二節 兼好法師と徒然草	(69)
第五章 武士、庶民の文学	(74)
第一節 軍記物	(74)
一、保元物語	(75)
二、平治物語	(77)
三、平家物語	(77)
四、太平記	(90)
五、義経記と曾我物語	(92)
第二節 御伽草子	(93)
一、序説	(93)
二、御伽草子の種類	(93)
第三節 狂言	(96)
一、序説	(96)
二、狂言の内容と種類	(99)
第四節 小歌	(101)

近 世 の 文 学

第一章 江戸時代	(105)
第二章 近世の小説	(110)
第一節 井原西鶴と浮世草子	(110)
第二節 読本	(120)
第三節 洒落本	(126)
第四節 滑稽本	(126)
第五節 人情本	(128)
第三章 芭蕉と一茶の俳句	(130)
第一節 松尾芭蕉	(130)
第二節 小林一茶	(133)

第四章	近松門左衛門の浄瑠璃……………	(136)
第五章	歌舞伎……………	(140)

近 代 の 文 学

第一章	明治時代の文学……………	(144)
第一節	明治維新と日本近代文学の成立……………	(144)
一、	明治維新と明治社会……………	(144)
二、	自由民権運動と政治小説……………	(146)
三、	坪内逍遙と小説神髓……………	(151)
四、	二葉亭四迷と浮雲……………	(153)
五、	北村透谷……………	(155)
六、	尾崎紅葉と硯友社……………	(157)
七、	樋口一葉……………	(160)
第二節	浪漫主義文学……………	(163)
一、	幸田露伴……………	(163)
二、	徳富蘆花と不如帰……………	(164)
三、	与謝野晶子とみだれ髪……………	(166)
第三節	自然主義文学……………	(170)
一、	島崎藤村……………	(173)
二、	田山花袋……………	(175)
三、	国木田独歩の窮死……………	(178)
四、	長塚節の土……………	(179)
五、	徳田秋声……………	(181)
第四節	森鷗外と夏目漱石……………	(183)
一、	森鷗外……………	(183)
二、	夏目漱石……………	(191)
第五節	反資本主義文学……………	(196)
一、	木下尚江……………	(197)
二、	石川啄木……………	(197)
第二章	大正、昭和の文学……………	(200)

第一節 大正、昭和時代	(200)
第二節 耽美派の文学	(203)
一、永井荷風	(204)
二、谷崎潤一郎	(205)
第三節 白樺派の文学	(207)
一、武者小路実篤	(208)
二、志賀直哉	(210)
三、有島武郎	(214)
第四節 新思潮派	(216)
一、芥川竜之介	(217)
二、菊池寛	(225)
第五節 プロレタリア文学	(226)
一、種蒔く人	(226)
二、文芸戦線	(228)
三、文芸戦線の分裂	(229)
四、ナップの時代	(230)
五、主な作家と作品	(231)
(一)、葉山嘉樹	(231)
(二)、黒島伝治	(233)
(三)、小林多喜二	(236)
(四)、宮本百合子	(240)
第六節 新感覚派	(244)
一、横光利一	(245)
二、川端康成	(246)

古代の文学

第一章 古代前期（奈良以前及び奈良時代）

第一節 序説

日本史で古代前期というのは、おおかた紀元五世紀頃から八世紀末の四百年間、すなわち文字の歴史があつてから794年の平安遷都までの間を指す。その中でも奈良時代を中心に行っている。日本では四世紀頃の漢字の伝来までは、無文字の時代で、文学といへば口誦以外になかった。それに奈良朝以前は、都もたびたび変り、全国的に統一しておらず、文学的にも甚だおぼつかなかった。八世紀の初頭初めて全国を支配した天皇制が確立し、都を奈良に定めた。当時の奈良は、天皇と貴族と役人または彼らの召使である奴隷の都であつた。だから奈良文化は、奴隷の血と汗で築き上げた宮廷貴族の文化である。神話伝説文学にしても、上代の伝説を素材にしながら、彼ら支配者の手によって焼きなおしたもので、彼らに都合のよいように翻案したものであつて、人民の文化ではない。いわゆる天照大神あまてらすおほみかみの作り話や神武天皇じんむの東征などは、よくこのことを証明している。ただわずかに「万葉集」に表れる美しい男女間の恋歌さきもりのうたや防人歌あずまうたに出てくる兵役にとられる苦しみを歌ったもの、東歌に表われる百姓の内心の声などが当時の人民的文学の素樸な面影をいく分か残しているくらいである。

この時代は、わが中国の隋が滅びて唐朝に入った頃で、奈良時代は、わが国のいわゆる盛唐期に当る時代である。日本では、三世紀頃からすでに中国大陸との通交が始まっている。七世紀しょうとくたいし聖徳太子の時おののいもこ小野妹子を隋に派遣したことがあつた。奈良朝に

入ってから盛んに遣唐使や留学生を派遣して、大陸から中国文化を吸収し、一時遣唐使とその随員の総人数は五、六百名にも達した。留学生の留学期限も長く、おおむね十年、二十年とし、長いものは三十年にも及んだのがある。しかもその帰朝に際しては、唐から大量の典籍を携えて帰るのはもちろん、またしばしば唐の学者、僧侶を伴ない帰ったのである。だから奈良文化の特徴といえ、貴族的文化であり、「唐風」であると言えよう。

この章の奈良文学は、主として「記紀」及び「万葉集」を中心で紹介した。その外、この時代の文学としては、また播磨風土記、常陸風土記、出雲風土記などの伝説を内容とした風土記文学や懷風藻、仏足跡歌碑などの詩歌集があるが、都合上これを省略した。

第二節 神話伝説文学

言語は社会的産物であり、労働の所産である。われわれの祖先である大昔の原始人は、生きるために自然と絶えず命がけの戦いをしなければならなかった。かれらは自然との戦いにおいては、決して一人ひとりばらばらになって戦うのではなく、集団的に行わねばならなかった。このように集団的に自然との闘争という実践過程を通して、おのずから頭脳が発達し、手が発達し、それとともに客観的必要から相互間の意志を交流する言語も発生し発達した。即ち、労働生産の発達に伴い相互間の意志交流の手段としての言語もおのずから発達し、言葉の量的方面も質的方面も逐次豊富多彩となってきた。

言語は労働の産物であると同時に労働に力を与え、労働を推し進める原動力ともなる。大昔の人人が言語という手段を持つようになってから、ますます自然に対する認識力を高め、労働方法を会得し、しかして生産に対する願望や情熱を高めていく。これらの労働方法、生産に対する願望情熱などを表す言葉が一定の形式となったときすなわち原始的文学となるのである。例えばわれわれが今でも共同労働をするとき、或は綱引でもするときによく

「エッシェエッシェ」や「ワッシェワッシェ」の声を発するのであろう。いうまでもなくこれは労働するときに、人人が自然に発した声である。このような自然に発出した呼声によって、人人は呼吸を調整し、歩調を合わせ、ひいては労力を節約し、疲労を忘れる。同様に昔の人が集団的労働をする場合にも、互に呼び掛け、励まし、慰さめ、或は歩調を合せるために、「エッシェエッシェ」の如き声を出したに違いない。よって原始的な言葉は労働と固く結びついており、それが発達するにつれてある一定の形——形式をとるようになり、或は簡単な音調を伴う歌の形となる。これが即ち原始的文学の詩歌の形である。

ちょうど言葉や原始的文学の詩歌が労働の所産であるように、大昔の人人は、皆踊りや宗教的儀式を愛していた。原始人の踊りは非常に素樸でありながら極めてはつらつとして新鮮味があり、現実的生活を表現し、かれらの生産労働と固く結びついている。かれらは舞踊という形式を通して、労働を謳歌し、疲労を回復し、互に慰め、励まし合うと共に、また舞踊というものを生産の経験を交流し、技術的修得の手段として自然との戦いの武器とも見なすのである。

われわれの祖先である原始人は、よく生産労働に出る前踊りをした。かれらはまだ、かれらの踊りが労働に与えた積極的意義を正しく理解することができず、かえって、かれらの歌や踊りなどがある何らかの神秘的な力があるかのように思い、それをやったが故に、人にある神秘的な力につき、それでもって初めて自然との戦いにうち勝つことができたのだと考えていた。それゆえに原始的芸術である詩歌、舞踊、音楽などは、いつの間にか神秘的なヴェールを覆いかぶせるようになり、何らかの宗教的イデオログと固く結び付き、ひいては固定的な固苦しい儀式ばったものになったのである。

日本古代の文化芸術もほぼこのようななりゆきをたどっている。もちろんどの民族も、それ固有の歴史的、社会的、民族的特

徴を持たねばならない。日本の古代文芸、特に神話伝説の時代においては（他の民族も同様であるが）、非常に宗教的色彩が濃厚であることは、言うまでもない。例えば今日まで伝えられている「トコヨの国」の話や祝詞、^{のりと}宣命^{せんみょう}などに表われている伝え話などは古代人のそのままの素樸な考え方を表している。それはそのまま原始的な文芸であり、原始的な宗教でもあった。

〔付録〕

※トコヨの国： 大昔日本列島に住む大和民族は、おそらく今の近畿地方^{きんき}の奈良附近すなわち大和地方の海浜一帯で、採集漁猟をしながら^{ゆうらく}邑落生活を営んだのであろう。当時かれらの生産手段と言えはすなわち手当たり次第の石塊、棍棒や貝殻などであり、後になってやっと原始的な弓矢を持つようになった。またその生産状況にふさわしく、かれらの思想状態も極めて素樸であり、自然現象に対する説明はもちろん、「自分」に対する認識も甚だ幼稚であって、むしろとんでもない妙な考え方をずいぶんもっていた。なによりもかれらは「生」と「死」という現象を理解することができなかった。かれらは睡眠や夢などをややもすると死という現象と混同し、自分と自分の頭の働きである思想との関係ももちろん理解するよしもなかった。よってかれらは、どうも現実的人間という自分の体の外に、何となくまた別の何かの「あるもの」があるように思われてならなかった。だから人間が眠ってしまってもその「もの」が盛んに活動し、また仲間の誰かが死に、獣にくわれてしまっても、（夢の中で）かれと会うことができた。だからかれらは、どうしても自分の体の外にこの「あるもの」のあることを信じねばならなかった。これがすなわち後で人人のいう「靈魂」であり、かれらはこれをむしろ永遠不滅のものだと信じていた。このような考え方からして、海浜で邑落生活を営む大昔の日本民族は、ついにかれらが住む現実の世界の外に、どこかにある「ところ」がなければならぬと考え、それはおそ

らく海の彼方か地の下かにあるに違いないと思っていた。そのような、見たことはないが、確かにあらねばならない不可思議なところを、日本人の祖先は、「トコヨ（常世）の国」といった。このトコヨの国はなんでも聞くと恐ろしいところだと考え、人が誰でも死んだらそこに行き、そのトコヨの国の人と生まれかわり、そしてその食物を食い、そこでも人間世界即ち「^{しやば}婆婆」とだいたい同じ様な生活をするのだと考えていた。だから海辺の邑落に住む人人の祖先は、皆そこに住んでおり、父母や自分もいつかはそこへ行かねばならないと考えていた。このような原始的な宗教的な考え方をアニミズム即ち靈魂崇拜という。

※^{しょうりよう}精靈の話：アニミズム即ち靈魂崇拜と共にたいの原始人にありがちなもう一つの原始的な宗教形態はいわゆるフェティシズム即ち物神崇拜（^{じゆぶつうはい}呪物崇拜）である。大和地方に住んでいる昔の日本人ももちろん物神崇拜即ち万物有靈の考え方を持っていた。かれらの考えとしては、邑落のすべての山川草木地水火風にみな精霊があると信じていた。それから大自然にはこのような精霊があるばかりでなく、また精霊よりもずっと神通力の強い「神」というものもいた。精霊は人間の味方であるというよりもむしろ人間の敵であり、ややもすると人間に災害を与えるのであるが、神というものは、どちらかという、割合人間に同情的であり、よく精霊の侵害から人間を守護してくれた。それで日本人の祖先は神を非常にありがたいものだとし、神に感謝の意を表し、神に守られるよう祈願するのであった。

※^{のりと}祝詞：日本人の祖先が神に感謝の意を表し、神に祈願する時には大へんおごそかな神事を行い、その時にはたいの妙な身ぶりをして踊りながらいかめしような詞章を唱えるのである。こういう神事を行う時に唱える詞章は即ち「^{じゆもん}呪文」というもので、これが後に「^{のりと}詔旨」に転化したのである。

詔旨は神にささげることばであるが、その外に神事を行う時宮廷の人人や住民達に呼びかけてそれに聞かせる形の詞章もある。

これを「祝詞」という。つまり祝詞というのは人間を対象にした神の意志を伝える神の命令のようなものである。要するに「詔旨」も「祝詞」も宗教儀式的呪文から漸次成長して一種の宗教学となつたものである。

次に例文として祝詞の中の一節を記しておく。
たかまがはら かみすま すめらがむつかむろ きかむろ みのみこと すめまみのみ
高天原に神留ります、皇親神漏岐神漏美命以ちて、皇御孫
こと たかみくら ま しるし
命を、天つ高御座に坐さしめて、天つ靈の鏡劔を捧げ持ち賜ひ
て、言寿宣たまはしく、皇宇都の御子皇御孫命、此の天津高座
こととはまのり すめらがうつ あまつ
に坐して、天津日嗣を、万千秋の長秋に大八洲豊葦原瑞穂国
ましま ひつぎ よろづあき ながあき おほやまとよあしはら みずほのくに
を、安国と平けく知らしめせと言依し奉り賜ひて、天つ御量り
やすくに たひら ことよき
もちて、事問ひし磐根木根立、草の片葉をも言止めて、天降り賜ひ
おすくに
し、食国の天の下と天つ日嗣知らしめす、……

これは祝詞の中の大殿祭の始めにある一小節である。その意味は結局天皇に対する形容句にすぎず、言わば天皇の資格を表しているものである。

第三節 古事記と日本書紀

「古事記」と「日本書紀」はおそらく日本文学史に出てくる最初の整った本の形をしたものであろう。時代から言って、記紀は神話伝説の時代よりずいぶん後の奈良時代以後に編集されたものである。

「古事記」は 712（和銅 5）年太安麻呂の撰したもので、上、中、下の三巻からなっている。「日本書紀」は 720（養老 4）年舎人親王等が撰したもので、これは漢文体で書いた三十巻よりなる歴史書の形をしたものである。どちらも神話、伝説、歌謡、物語などの諸要素を取り入れているが、しかしこれはすでに古伝神話そのままの原始的な記録ではなく、もはや人民の生活から生まれたものとはいえない。日本では奈良時代以後すでに天皇を中心とする大和国家が次第に勢力を固めていった。支配者内では氏族制度による豪族の上下の位置づけもだんだんできあがってき